



Title	初期近代英語期における「promise+目的語+to不定詞」と「promise+目的語+that節」の交替について
Author(s)	大津, 智彦
Citation	大阪大学英米研究. 2019, 43, p. 59-71
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99431
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

初期近代英語期における 「promise+目的語+to 不定詞」と 「promise+目的語+that 節」の交替について

大津 智彦

1 導入

1.1 調査の目的

Quirk et al. (1985: 1216) は、次の (1 a) のような「promise+目的語+to 不定詞」(以下、不定詞構文) という形式をとる構文を、to 不定詞の意味上の主語が目的語ではなく主節の主語である点において例外的ではあるものの、(1 b) のように that 節が続くものと同義であるとして認知している。

- (1) a. Sam promised me to get some food
b. Sam promised me that he would get some food.

ところが2000年前後から(1 a)のように「promise+目的語+to 不定詞」の形をとる構文を容認しない母語話者が多いことが指摘され始めている。高見(1998)はインターネット上のLinguist Listで不定詞構文の適格性について友人に質問してもらった結果、アメリカ、イギリス、アイルランド、オーストラリア、オランダなどに住む84名の母語話者から回答があり、使用できないと答えた人が52名(62%)、使用できると答えた人が32名(38%)であったと記している。次にTakaie(2002)によるとCOBUILD、Brown、Frown、LOB、FLOBを検索した結果、不定詞構文の使用例はほとんど抽出

されなかったという。さらに鷹家・林（2004：140-141）では母語話者のインフォーマントにアンケート調査をしたところ「promise+目的語+that節」（以下、that節構文）の使用率は英米人（各41名）ともに90%以上であるのに対し、不定詞構文の使用率は英米人ともに40%弱であると報告しており、高見（1998）の報告とほぼ一致している。鷹家・林（2004：141）はアンケート結果から、英語学習者は「…に…すると約束する」の意味ではthat節を使うのが無難で、約束する相手がme、youまたは文脈から明らかである場合にはそれを略して不定詞節になると覚えておくのがよい、とまとめている。最後に久野・高見（2017：227-231）は高見（1998）の報告を再掲したのち、不定詞構文について近年どのような記述がなされているか調査している。それによると、上記、鷹家・林（2004：141）が英語学習者へ不定詞構文を使用することを推奨している点に加えて、英和辞典、英英辞典における不定詞構文に関する記載の変化に言及がなされている。例えば、『ジーニアス英和辞典』の第4版（2006）から第5版（2014）への改訂にあたり、第4版では不定詞構文とthat節構文を書き換え可能であると記載していたものを、第5版では語法欄で不定詞構文を「認めない人がいるので避けたほうがよい」と否定的な方向へ変化させていることを挙げ、さらに、『ウィズダム英和辞典』（第3版、2013）では不定詞構文を≪非標準≫とし、『ユースプログレッシブ英和辞典』（初版、2004）、『プログレッシブ英和中辞典』（第5版、2012）ではpromiseがとる構文パターンとして不定詞構文を記載していないと指摘している。また、久野・高見（2017：227-231）は主に学習者用の英英辞典も調べて、1970年代には不定詞構文が用例に挙がっていたのに、2000年以降出版されたものには記載がないとし、これは大量の言語統計が使えるようになったため頻度数の少ない構文パターンは記載されなくなってきたからではないかと見ている。そして鷹家・林（2004）と同様に、日本人はthat節を用いた構文パターンを使用するのが無難であると勧めている。

さて、以上の先行研究の概観から、promiseが目的語をとった場合、不定詞構文が続くかthat節構文が続くかに関し、近年、変化が生じた可能性が

初期近代英語期における「promise+目的語+to 不定詞」と「promise+目的語+that 節」の交替について

あることが窺える。そしてその方向は不定詞構文から that 節構文へと向かっている。しかし、Rhodenburg (1995) では、初期近代英語期を通して、「目的語+that 節」の構造をとっていた一連の動詞が不定詞節をとるようになる様子が明らかにされている。また、Iyeiri (2010:7) も Rhodenburg (2006:159-160) が the Great Complement Shift と呼んだ現象を the first complement shift と the second complement shift の 2 段階に分類し、forbid のような verbs of implicit negation に関し、後期中英語期から初期近代英語に当たる時期において that 節から to 不定詞節への推移が起こったとし、これを the first complement shift と呼んでいる。そうすると近年における promise の上記の推移はこういった that 節から to 不定詞節への推移と逆行していることになる。

そもそも、promise は歴史的に見て、それが目的語をとるとき、that 節あるいは不定詞節のどちらが続くかという点に関してどのような様態を経てきたのだろうか。Rhodenburg (1995) や Iyeiri (2010) で調査対象となった動詞と同じように初期近代英語期に that 節から to 不定詞節へと推移したのであろうか。あるいは、一貫して that 節構文のほうが優勢であったのだろうか。そのあたりの事情が分からない限り、近年の動きを complement shift に逆行するものと捉えることはできない。今回の研究では promise が目的語をとる時の補文構造の歴史の変遷全体を明らかにする一環として、まずはその起源を確認し、Iyeiri (2010) による the first complement shift が起こったとされる初期近代英語期における実態をコーパスを用いて調査したい。

2 調査方法

2.1 起源：OED Online における記載

Promise が目的語をとった場合、どのような節が続くかの起源を OED Online で調べてみたところ、不定詞節の初出例が (2)、that 節の初出例が (3) であった。

- (2) 1467 in *Manners & Househ. Expenses Eng.* (1841) 558 (MED) He [sc. the parker] hathe promessed me to make it [sc. a whelp] as wel as he kane fore me.
- (3) c 1475 tr. C. de Pisan *Livre du Corps de Policie* (Cambr.) (1977) 136 (MED) Gayus Marcus..promysed them that..he wolde rewarde them.

OED Online の初出例を見る限り、不定詞節構文と *that* 節構文はほぼ同時期に出現しており、どちらが先行したのかは不明である¹。また、その後の変遷についても、両構文とも 2000 年前後まで用例が挙げられており、両者の盛衰を知ることはできない。これは *OED Online* に限らず辞典の限界であり、使用の実態を観察するにはコーパスを用いた調査を行う必要がある。

2.2 The Parsed Corpus of Early English Correspondence (PCEEC)

セクション 2.1 で見たように、*OED Online* によると不定詞節構文、*that* 節構文ともに初出が 15 世紀後半である。これはちょうど Iyeiri (2010) のいう *the first complement shift* が始まった時期に一致する。よって、今回の調査では目的語をとる *promise* の補文についてその最初期から辿ることになる。もちろん、動詞によって推移が開始した時期にはずれはあるだろうが、多くの動詞がこの時期に動きを見せており、*promise* についてもその前提に立った調査である。

さて、今回用いたコーパスは *Parsed Corpus of Early English Correspondence* (PCEEC) である。PCEEC はヘルシンキ大学で開発された *Corpus of Early English Correspondence* (CEEC) を基に文法標識を付与したり、構文解析を施したものである。2006 年に一般公開され、*Oxford Text Archive* から入手できる。構成を簡単に記すと、1410 年から 1681 までの間に 666 人によって書かれた 4970 通の私信からなる総語数が約 220 万語のコーパスである。このコーパスは歴史的な社会言語学 (*historical sociolinguistics*) の研究を念

表 1 PCEEC の時代別語数

時代	年代	語数
M 3	1350-1419	19,505
M 4	1420-1499	364,317
E 1	1500-1569	309,220
E 2	1570-1639	910,675
E 3	1640-1710	555,415

頭に編まれたものであり、私信が選ばれたのは Biber (1995) にも示されているように私信が最も口語に近い使用域の特徴を有するからであるという。表 1 に時代、年代別の語数を載せておく。なお、時代を示す記号および年代の区切りは Helsinki Corpus のそれを使用しており共通である²。

2.3 コーパスの検索

PCEEC の検索はコンコーダンサーの TXTANA を用い、*OED Online* に記載のある *promise* の異綴り形も含めてキーワードとし、ワイルドカードを利用してすべての屈折形が検索できる形で行った。検出された全用例の中から目的語を伴うものだけを抽出し、各用例に対して、年代、補文の種類（不定詞節か *that* 節か）、主語の種類（名詞か代名詞か）、目的語の種類（名詞か代名詞か）、目的語の後の挿入句の有無、などのパラメーターに関する情報をカード型ソフトウェア（ファイルメーカー Pro）に入力していった。ただし、この際、下記のように主節の主語と補文節の主語が異なる場合は不定詞節と *that* 節の交替が不可能なので対象から外した。

- (4) Foster hath promised me that yow shall receive this letter thursday night next. (Holles 1630)

また、(5) のように *promise* が分詞になっている場合も対象から外した。

- (5) we pulled up the hedges, pales, and gates, and made good fires : his Excellency promising us that, if the country relieved us not the day following, he would fire their towns. (Wharton 1642)

3 調査結果

3.1 年代別分布

表 2 に that 節と不定詞節の年代別分布を集計した。この表から、相対的に見て不定詞節の比率は M4 期と E1 期に低く、E2 期と E3 期に高くなっていることが分かる。もう少し具体的に言うと、不定詞節の比率は前半 2 期には 50% 前後、後半の 2 期には 81% 以上と後半 2 期に大きな伸びを示している。このことから目的語をとる promise においても初期近代英語期において that 節から不定詞節への complement shift が進行していたことが確認された³。これはセクション 1.1 で見たように近年の英語において不定詞節を避けようとする傾向とはまったく逆の方向であり、他の動詞と同様にむしろ積極的に不定詞節を使おうとする方向に動いていたことを示している。当時の母語話者にアンケートを取るわけにもいかないので、不定詞節の場合の容認度を確かめることは不可能だが、promise においても that 節から不定詞節への complement shift が進行していた以上、不定詞節の容認度は高かったのではないかと推察できる。

加えて注目しておきたいのは、M4 期において不定詞節の比率が既に過半数を超えている点である。セクション 2.1 で見たように、*OED Online* において、目的語をとる promise に続く補文節は that 節、不定詞節ともに初出例が 15 世紀後半であった⁴。*OED Online* によると promise の動詞形は名詞形がフランス語、ラテン語の両者から借入されたあと動詞に品詞転換したものであるが、その最初期から不定詞節を高頻度で用いていたことになる。Visser (1973 : 2235) は “verb + object/subject + infinitive” の形式が中英語および近代英語において広範囲に激増したと記しているが、promise もこの時

初期近代英語期における「promise+目的語+to 不定詞」と「promise+目的語+that 節」の交替について

表 2 that 節と不定詞節の年代別分布

年代	(a) that 節	(b) 不定詞節	(b)/(a) + (b) (%)	合計 (a + b)
1420-1499(M4)	13	22	63%	35
1500-1569(E1)	7	6	46%	13
1570-1639(E2)	7	34	83%	41
1640-1710(E3)	4	17	81%	21
合計	31	79	72%	110

期の不定詞節の勢いに影響を受けていたものと思われる⁵。

3.2.1 Complexity Principle の影響

Rhodenburg (1995: 368) は初期近代英語期において that 節から不定詞節への推移が進む中、それに一定の歯止めをかける要因として次に引用する“Complexity Principle” というものが働いていたと実証した。

“The less directly the dependent clause is linked to its superordinate clause, or the more complex the dependent clause turns out to be, the greater is the need to make its sentential status more explicit.”

具体的に言うと、従属節の複雑性を増す主な要因とは、①主節動詞の目的語が代名詞よりも（時には3語以上からなる長い）名詞句である、②主節動詞の目的語と従属節の間に副詞句や副詞節がある、③従属節が否定形である、④to 不定詞が連続する、などの場合である。Rhodenburg (1995) に挙げられている①から④の例を下に示す。

- (6) They also at the sight of each new moon . . . bespeak their cattle to her protection, obnoxiously imploring the Pale Lady of the Night that she will leave their bestial in as good plight as she found them. (= (8), Rhodenburg (1995))

- (7) Then she counselled him that when he arose in the morning he should beat them without mercy. (= (11), Rhodenburg (1995))
- (8) . . . , and withal commanded them that they should not ordayne for him any more but so small a competence, as might euen scarcely maintain nature. (= (23), Rhodenburg (1995))
- (9) . . . , and as a pious man advised his friend, that to beget mortification he should frequent churches, and view monuments, and charnel-houses (= (26), Rhodenburg (1995))

上記のうち、①と②の要因について今回の調査結果に影響がみられるかどうか見ていきたい。なお、③と④に関しては該当する用例が非常に少なかったなので今回は対象から外す。

3.2.1.1 目的語の種類が与える影響

表 3 は年代を考慮に入れず、*promise* の目的語が代名詞あるいは名詞句の場合で続く補文節がどう分かれるか集計したものである。表からは目的語が名詞句の場合、不定詞節が続く比率が 78%、目的語が代名詞では同比率が 71% と、かえって名詞句の場合のほうが不定詞節が続く比率が高くなっている。ちなみにフィッシャーの正確確率検定を行ったところ、有意差はないとの結果であり、この調査に限って言えば目的語の種類が補文節の種類に影響を与えとは認められないことになる。しかし、これには理由があり、今回抽出された「名詞句の目的語 + 不定詞節」の用例では、名詞句はどれも短く、次の例のようにすべて「所有格代名詞または冠詞」プラス「名詞」のように 2 語からなる組み合わせである。

- (10) I haue promised the tennants to effect it for them before Whitsontide.
(Wenworth 1620)

表 3 目的語が名詞句または代名詞の場合

目的語の種類	(a) that 節	(b) 不定詞節	合計 (a + b)	(b)/(a) + (b) (%)
名詞句	2	7	9	78%
代名詞	29	72	101	71%
合計	31	79	110	72%

それに対して、唯一目的語の名詞句が複雑な形式を持つ 1 例では次のように that 節が続き、complexity principle が働いたものだと推察される。

(11) . . . he promysyd bothe Jude` and me + tat he shold do. (Paston 1472)

説得、要求、命令といった意味を持つ “manipulative verbs” について調査した Rhodenburg (1995: 375-376) でも目的語の種類が与える影響について検討されているが、“In this study any affinity between complex objects and the more explicit finite clause is certainly far less conspicuous. There are only a handful of examples where the choice of the finite clause could be said to have been triggered off by a relatively complex object.” とし、特に目的語が関係詞節を伴うほど複雑な名詞句の場合、that 節が続く点に注目している。引用文中の “far less conspicuous” というのは Ando (1976: 532-533) における “make + 目的語” のあとに原形不定詞、to 不定詞のいずれが続くかの研究と比較してということである。一方、Rhodenburg (1995) やこの調査のように that 節か to 不定詞の選択においては、原形不定詞とは異なり to 不定詞の to が補文標識としての役目を果たすため、目的語が単純な名詞句ではより explicit な that 節を用いる必要性が低いと考えられる。よって、目的語が相当複雑な名詞句でなければ explicitness が求められず、that 節が続かないものと思われる。

3.2.1.2 目的語と補文節の間にある副詞類の影響

次に promise の目的語と補文節の間に副詞句や副詞節がくる場合、that 節

あるいは不定詞節の選択に影響があるかどうかを見てみたい。表 4 は今回対象とした全時代を通して集計した結果である。間に副詞類がある場合は不定詞節の比率が 60%、ない場合はそれが 75% となり、副詞類が目的語と補文節の間にこない方が不定詞節をとる比率が 15% 高い。カイ二乗検定を行うと残念ながら副詞類の有無による有意差は認められなかったが、下記のような例をみると不定詞節を続けることは非常に難しいと思われる。

- (12) . . . my Lord has promised me that if theare be any meeting appoynted before him, which I tould him I extremly desired, that he might see and judge of the justnes and resonablenes of the accounte. (Cornwal 1641)
- (13) . . . his master liketh him exceeding well and hath promised mee that when Ireland shall be againe settled he will preferr him to a very good place. (Oxinden 1642)

用例 (12)、(13) とともに副詞節の挿入があり、仮にこののちに to 不定詞を続けた場合、副詞節もしくは不定詞節の帰属先に混乱が生じる可能性がある。特に (12) などでは explicitness を確保するために接続詞 that が 2 度繰り返されている点に注目されたい。

しかし、「副詞類有 + 不定詞節」の組み合わせ 15 例のうち 2 例が単なる副詞句ではなく次の例のように副詞節を伴うものであった。こういったことはこの時代の「promise + 目的語 + 不定詞節」の勢いの強さの証左と言えるのではないだろうか。

- (14) I promised you when you went out of Towne to giue you the first news of the Battell betwixt the Duke of Loraine and Crequy which was then expected. (Marvell 1677)
- (15) I promysse you as I am Cresten man to discharge yt schortely. (Cely 1482)

表4 目的語と補文節の間に副詞類がある場合

副詞類の有無	(a) that節	(b) 不定詞節	合計 (a + b)	(b)/(a) + (b) (%)
有	10	15	25	60%
無	21	64	85	75%
合計	31	79	110	72%

4 まとめ

本論文は、2000年前後を境に動詞 promise が目的語をとる際に続く補文節として不定詞節を避け、that節が好まれる傾向が生じてきたという最近の報告が、従来から受け入れられている補文節の推移、つまり、that節から不定詞節へという歴史的な流れに反することから、「promise+目的語」に続く補文節の変遷について、その最初期から洗い出すことを目的とした。今回は初出例が認めれる後期中英語期から初期近代英語期を対象とし、Parsed Corpus of Early English Correspondence を検索して調査を行った結果、次のことが分かった。①「promise+目的語」に続く補文節は最初期から不定詞節が過半数を超えるくらい高い頻度で現れる、②不定詞節の頻度はその後も増加し続け、初期近代英語期末（1710年）までに8割以上を占めるようになる、③これらのことから、この時期、promiseはいわゆる complement shiftの波に乗っており、母語話者において不定詞節の容認度は高かったものと推測される、④Complement shiftに一定のブレーキをかける Complexity Principleの要因が働く場合においても統計的有意差が得られなかったことから、不定詞節の勢いが強かったことが窺われ、③に記したことがサポートされる。

さて、今後の課題は後期近代英語から現代英語にかけての動きである。不定詞節の勢いはどこまで維持されるのだろうか。2000年前後に現れだしたという不定詞節を避ける傾向の萌芽は実はそれ以前から観察されるのではないか。また、なぜ不定詞節を避ける傾向が生じることになったのか。こういった問題を次の調査では扱いたい。

注

- 1 *Oxford English Dictionary*, 2nd Edition, Version 4.0 (CD-ROM) では下記の用例が挙げられているが、これは *OED Online* では c 1500 (▶?a 1475) に年代が変更されている。
c 1420? Lydg. Assembly of Gods 482 Ye me promysyd That my myght of noon shuld haue be dyspysyd.
- 2 以上の情報は <http://www.helsinki.fi/varieng/CoRD/corpora/CEEC/index.html> および PCEEC を Oxford Text Archive より入手した際に同梱されていた corpus_stats という電子ファイルから得た。なお、論文中にコーパスから引用した例文には、同梱されていた letter collections という電子ファイル内で用いられている Collection 名と年代とを併記して付与した。
- 3 なお、用例数の違いは各年代におけるコーパスの語数の影響が考えられるので 100 万語単位にノーマライズしたのちカイ二乗検定を行ったところ、「 $\chi^2(3) = 17.399, p < .01$ 」となり、統計的に有意という結果が出た。
- 4 この状況は目的語をとらず補文節が続く場合においてもあまり変わらず、*OED Online* では不定詞節の初出例が 1430 年、that 節の初出例が 1464 年である。
- 5 Visser (1973 : 2331) は promise を “Verbs of Saying and Declaring” の一員として “verb + object/subject + infinitive” 構文の中に入れていいる。

参考文献

- Ando, Sadao (1976) *A Descriptive Syntax of Christopher Marlowe's Language*. Tokyo : University of Tokyo Press.
- 藤内響子 (2016) 「初期近代英語における動詞の命題補部 - 特に現代英語において、動名詞補部はとるが不定詞補部はとらない動詞についての定量言語学的アプローチ -」『九州情報大学研究論集』第 18 巻 : 63-74.
- Iyeyri, Yoko (2010) *Verbs of Implicit Negation and their Complements in the History of English*. Amsterdam : John Benjamins.
- 久野暉・高見健一 (2017) 『謎解きの英文法 動詞』くろしお出版.
- 久保田正人 (2001) 「promise の意味と構造」『言語文化論叢』第 9 号 : 39-55. 千葉大学.
- Oxford English Dictionary Online. “Promise.” Oxford University Press.
<http://www.oed.com/> (参照 2018 年 8 月)
- Parsed Corpus of Early English Correspondence, text version. 2006. Compiled by Terttu Nevalainen, Helena Raumolin-Brunberg, Jukka Keränen, Minna Nevala, Arja Nurmi

初期近代英語期における「promise+目的語+to 不定詞」と「promise+目的語+that 節」の交替について

and Minna Palander-Collin, with additional annotation by Ann Taylor. Helsinki : University of Helsinki and York : University of York. Distributed through the Oxford Text Archive.

Rohdenburg, Gunter (1995) "On the Replacement of Finite Complement Clauses by Infinitives in English." *English Studies*, Vol.4 : 367-388.

Rohdenburg, Gunter (2006) "The Role of Functional Constraints in the Evolution of the English Complement System." *Syntax, Style and Grammatical Norms : English from 1500-2000* ed. by Christiane Dalton-Puffer, Dieter Kastovsky, Nikolaus Ritt, and Herbert Schendl, 143-166. Bern : Peter Lang.

Takaie (2002) "A Trap in Corpus Linguistics : the Gap between Corpus-based Analysis and Intuition-based Analysis." In T. Saito, J. Nakamura and S. Yamasaki (eds) *English Corpus Linguistics in Japan*. Amsterdam : Rodopi.

鷹家秀史・林龍次朗 (2004) 『103 人のネイティブスピーカーに聞く生きた英文法・語法』旺文社.

高見健一 (1998) 「John promised Mary to leave. は「正用法」か」『英語青年』第 144 巻 第 4 号 : 200-201.

西原俊明 (2000) 「主語コントロール動詞について - promise, beg, ask を中心として -」『長崎大学教育学部紀要 - 人文科学 -』No.61 : 47-56.

Quirk, R. et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.

Visser, F. Theodorus (1973) *An Historical Syntax of the English Language*. Part III, second half. Leiden : Brill.

吉川寛 (1985) 「「Promise」考」『国際関係学部紀要』1 号 : 105-113. 中部大学.